福留久大『リカード貿易論解読法』を読む

－比較生産費説の新地平－

田中 史郎（宮城学院女子大学、名）

経済理論学会 第71 回大会（2023/11/05）、東北学院大学

はじめに

- 福留久大『リカード貿易論解読法』（2022年）は、きわめて論争的な議論を展開している。挑戦的と言ってよい。

- 本書は全6章で構成されているが、主に以下の3点が示されている。
- 第1に、D.リカード『経済学および課税の原理』の徹底的なテキスト・クリティークにより、比較生産費に対するこれまでの通説的解釈に根本的な疑問を呈していること。
- 第2に、それを踏まえて、先行研究に対して鋭い批判を行っていること 。
- 第3に、さらに「福留比較生産費説」ないし「福留方式」とでもいうべき積極説を提示していること。
- 以上が本書の意義と言えよう。なお、本報告では、第1と第3の問題を主に検討し、第2の点については省略する。

なお、文献は、以下の通り。

- D.リカード(羽鳥卓也・吉澤芳樹訳）『経済学および課税の原理』上下、岩波文庫。訳文は必ずしも本書によらない。
- 福留久大『リカード貿易論解読法』社会評論社、2022年。

1. 比較生産費説の通説的な解釈

リカード「比較生産費説」の文言

有名な文言だが、議論の出発点となるので、掲載しよう。

- イギリスは、クロスを生産するのに1年間に100人の労働を要し、またもしもワインを醸造しようと試みるならば同一期間に120人の労働を要するかもしれない、そういった事情のもとにあるとしよう。それゆえに、イギリスは、ワインを輸入し、それをクロスの輸出によって購買するのがその利益であることを知るであろう。
- ポルトガルでワインを醸造するには、1年間に80人の労働を要するにすぎず、また同国でクロスを生産するには、同一期間に90人の労働を要するかもしれない。それゆえに、その国（ポルトガル）にとってはクロスとひきかえにワインを輸出するのが有利であろう。
- この交換は、ポルトガルによって輸入される商品が、そこではイギリスにおけるよりも少ない労働を用いて生産されうるにもかかわらず、なお行われうるであろう。ポルトガルはクロスを90人の労働を用いて製造することができるにもかかわらず、それを生産するのに100人の労働を要する国からそれを輸入するであろう。なぜならば、…有利だからである。」（リカード、191～192頁）

リカード「比較生産費説」の数字例の表示

上のリカードの文言を表で示せば、以下のようになる。

表1　リカード数字例での貿易前の労働量表示（労働量による表示）

	クロス	ワイン	
イギリス	100人	120人	220人
ポルトガル	90人	80人	170人
商品の生産量	2単位	2単位	4単位

- この表では、クロスにおいてもワインにおいてもポルトガルの方の生産費が低く（労働者数が少なく）、その意味で絶対的な優位性を持つ。
- したがって、一見すると、クロスにおいてもワインにおいてもポルトガルからイギリスに、一方的に輸出がなされるようだが、そうではないという。いわゆる、通説的な比較生費説という考え方である。

表1の通説的解釈（表2の導出）

表2　比較生産費の通説による解釈(機会費用表示)

	ワインに対するクロスの生産費(クロス生産の労働量／ワイン生産労働量)	クロスに対するワインの生産費(ワイン生産の労働量／クロス生産労働量)
イギリス	100/120≒0.83	120/100＝1.2
(労働量の大小)	＜	＞
ポルトガル	90/80≒1.13	80/90≒0.89

- イギリスにおいて、ワインに対するクロスの生産費（1単位のクロス生産に必要な労働量／1単位のワイン生産に必要な労働量）と、クロスに対するワインの生産費（1単位のワイン生産に必要な労働量／1単位のクロス生産に必要な労働量）を比較する。ポルトガルにおいても同様な計算を行う。そうすると、上の表2が得られる。機会費用表示ともいえる。
- すなわち、クロスの機会費用は、イギリスでは約0.83であり、ポルトガルでは約1.13だということである。ワインの機会費用は、イギリスでは1.2であり、ポルトガルでは約0.89である。
- したがって、クロスはイギリスからポルトガルに、ワインはポルトガルからイギリスに、それぞれ輸出が行われるという。これが通説的な比較生産費説の解釈であり、一般に流布している考え方である。一見すると正しいように見える。

比較優位に基づいた貿易の結果

表3　リカード数字例での貿易後の労働量表示

	クロス	ワイン	
イギリス	220人	0人	220人
ポルトガル	0人	170人	170人
各商品の生産量	2.2単位	2.13単位	4.33単位

- 通説的な解釈による比較生産費説に従って、両国とも、比較優位にたつ商品の生産に特化して生産すれば、各商品の生産量は増加している。そして、生産を停止した商品を貿易で補え合えば、マクロ的にも両国に利益が与えられることになる。これが通説的解釈の比較生産費説の眼目に他ならない。

- なお、「**2. 比較生産費説の通説に対する批判**」については省略する。

3. リカード比較生産費説の新地平

リカード『原理』の重要な指摘

以上のような解釈に対して、福留は新解釈を提起する。「新地平」と言っても過言ではない。まず、福留が依拠する、リカード『原理』の当該部分を引用しよう。

- 「このようにして、イギリスは、100人の労働の生産物（イギリスのクロス）を、80人の労働の生産物（ポルトガルのワイン）に対して、与えるであろう。このような交換は同国内の個人間では起こりえないであろう。100人のイギリス人の労働が、80人のイギリス人のそれに対して与えられることはあり得ない。しかし100人のイギリス人の労働の生産物は、80人のポルトガル人、60人のロシア人、または120人のインド人の労働の生産物に対して与えられ得るであろう。
- この点での単一国と多数国との間の差異は、資本がより有利な用途を求めて一国から他国へ移動することの困難と、資本が常に同国内で一つの地方から他の地方へ移動するその活発さとを考察することによって、容易に説明される。」（リカード、192頁）

リカード『原理』当該部分の福留による解釈

- 「「労働」と「価値・価格」との二重の視点に基づく考察は、リカードにおいても堅持されている。リカードは、引用した[B][E] にあるように、国内市場では資本移動が容易であるのに対して、国際市場ではそれが困難であるので、国内市場では労働価値説が適用されるが、国際市場では適用されないと想定する。そのうえで、労働価値説の妥当しないイギリスとポルトガルとの貿易取引において「100人の労働生産物（イギリスクロス）を80人の労働生産物（ポルトガルワイン）に対して与えるであろう」としている。「100人の労働生産物（イギリスクロス）」と「80人の労働生産物（ポルトガルワイン）」とが「何らかの意味で等価」であることが読み取れる。」（福留、20頁）

  →この解釈は、比較生産費説の新地平と言えよう。

福留による提起

- 「それは、「価値」ないし「価格」が等しいことを意味していると理解できる。「価値」にも単位があるものとして、価値（価格）の単位を、イギリスにおいても他の地域においても「ポンド」で表示する 。そこで、この等価の価値水準を仮に40百ポンドと仮定する。」（福留、20頁）

福留による提起の具体化

- 「そこで、この等価の価値水準を仮に40百ポンドと仮定する。また、一国内では労働価値説が妥当するので、W量のイギリスクロス＝ X量のポルトガルワイン＝40百ポンドである。
- また、一国内では労働価値説が妥当するので、X量のイギリスワインの価値は（40百×120/100=）48百ポンドであり、W量のポルトガルクロスの価値は（40百×90/80=）45百ポンドとなる。
- イギリスクロスは、ポルトガルクロスに対して価値(価格)上で優位にあり、クロスはイギリスからポルトガルへ輸出可能である。

- 同様に、X量のワインの価値は、ポルトガルで40百ポンドであり、イギリスでは48百ポンドである。ポルトガルワインは、イギリスワインに対して価値（価格） 上で優位あり、ワインはポルトガルからイギリスに輸出可能である。

- 貿易はあくまでも価値（価格） 上の絶対優位を基礎にして行われるのであって、その内実としての労働量の相対優位が位置づけられるのである。」（福留、20頁）

福留説のポイント

- ポイントの第1は、上の引用にある「100人の労働生産物（イギリスのクロス）を80人の労働生産物（ポルトガルのワイン）に対して与えるであろう」という文言に対する理解にかかる点である。
- 労働量を見る限りイギリスのクロス（100人）とポルトガルのワイン（80人）は異なった値であるが、リカードのこの文言から福留は、「何らかの意味で等価」であることを読みとる。そして、それは、「価値」（価格）から見れば等しいことを意味していると解釈する。互いが他に「対して与える」のだから、等しいエトヴァスが存在するのであって、それが「価値」（価格）だというわけである。これまでの通説においては、「労働」量を直接的に比較する方式（機会費用）で考えられてきたが、福留は、そこに価値ないし価格の視点を提起したといえよう。福留はこれを、「労働」と「価値・価格」との二重の視点という。
- そして、ポイントの第2は、「国際市場では（労働価値説が）適用されない」が、「国内市場では労働価値説が適用される」（福留、20頁）という視点の提起である。なぜならば、リカードが、先の引用で述べているように、「単一国と多数国との間の差異は、資本がより有利な用途を求めて一国から他国へ移動することの困難と、資本が常に同国内で一つの地方から他の地方へ移動するその活発さ」（リカード、192頁）にあるからだ。福留の言葉で示せば、「国内では資本移動が容易であるのに対して、国際市場ではそれが困難」（福留、20頁）だからである。

4. リカード数字例の新解釈

- 先の表1を念頭に置いて、福留のオリジナルである「福留方式」が示されることになる。先の提起を表に表したものである。

表4　リカード数字例での貿易前の価格表示（福留方

	クロス	ワイン
イギリス	£40百	£48百
（価格の高低）	＜	＞
ポルトガル	£45百	£40百

注）福留『解読法』21頁の表を若干修正

- この価格表示は、先のリカードの「100人の労働生産物（イギリスのクロス）を80人の労働生産物（ポルトガルのワイン）に対して与えるであろう」という文言を読み込み、「W量のイギリスクロス＝X量のポルトガルワイン＝40百ポンド」（福留、20頁）を基軸として計算したものである。

福留新解釈による結論

- このように見れば、クロスの場合、ポルトガルでよりもイギリスの方の価格が安いので、イギリスからポルトガルに輸出が行われよう。また、ワインでは、反対に、ポルトガルの方に価格の優位性があり、ポルトガルからイギリスに輸出が行われよう。
- いずれにしても、こうして「貿易は、価値（価格）上の絶対優位を基礎にして行われるのであって、その内実として労働量の相対優位が位置づけられる」（福留、20頁）と述べられている。福留比較生産費説のロジックの核心は、ここにある。

- だが実は、リカードの示した数字例（表1）を、通説のように解釈しても、福留のように理解しても、結果から見れば同様になる。労働量をもって各商品の比較生産費を算出する方式、すなわち機会費用をもって理解する方式で貿易が行われることを示すことで表3が導かれた。また、福留のように、価格を媒介して算出する方式で理解して、貿易が行われるとすれば、やはり表3が導かれることになる。リカードの掲げた数字例では、いずれも表3のような結果を得られるのである。
- しかし、必ずしも明示的に示されていないが、この問題は次のような場合には明確な違いをもたらす。リカードのいう「イギリスがワイン生産の一方法を発見」（リカード、194頁）した場合である。続いて検討しよう。

5.「別の数字例」の問題

以下に見るように、リカードは、イギリスでワイン生産において新方法が発見され、ワインの価格が下落した場合を問題としている。関係部分を引用しよう。

- 「イギリスがワイン生産の一方法を発見し、そこでそれを輸入するよりはむしろそれを生産する方がその利益になるものと仮定すれば、イギリスは当然その資本の一部分を外国貿易から国内産業へ転換するであろう。イギリスは、輸出のためにクロスを生産することを止めて、自国でワインを生産するであろう。
- これらの商品の貨幣価格は、それに応じて左右されるであろう、すなわち、イギリスではクロスは引き続いて以前の価格にあるのに、ワイン（の価格）は下落し、ポルトガルではいずれの商品の価格にも変更は起こらないであろう。クロスは、その価格がポルトガルではイギリスよりも引き続いてより高いから、しばらくの間はイギリスから引き続いて輸出されるであろう。しかし、それと引き換えに（イギリスには）ワインではなく貨幣が与えられるであろう。」（リカード、194～195頁）

上記リカードの指摘にたいして、福留による解釈

- 「イギリスでのワイン生産の技術革新によってポルトガルのワイン生産のイギリスのそれに対する絶対的優位性が失われると、（ポルトガルワインのクロス生産に対する相対的優位性は保持していても）ポルトガルワインの輸出は不可能になり貨幣による支払いを余儀なくされるのである。ポルトガルはクロス輸出だけでなく、ワイン輸出も不可能となる、いわゆる片貿易の状態に陥る事例である。ここからは、貿易取引が牧歌的な物々交換ではなく、苛烈な価格競争として展開されること、同種商品間の価格競争に敗れて輸出商品なしの国も存在し得ることが読み取れる。」（福留、47頁）

この問題を「別の数字例」として考えておこう。

- 例えば、イギリスにおいて、ワイン生産の技術革新によって、それまで120人であった必要労働者数が90人になったとしよう。これをこれまでと同様に示せば、表5になる。

表5　別の数字例での貿易前の労働量表示

	クロス	ワイン	
イギリス	100人	***90人***	190人
ポルトガル	90人	80人	170人
商品の生産量	2単位	2単位	4単位

- この表5を前提として、通説のような に両国のそれぞれの商品生産の労働量で測った比較生産費、すなわち機会費用を求めると以下のようになる 。

表6　別の数字例での通説による解釈（機会費用表示）

	ワインに対するクロスの生産費（クロス生産の労働量／ワイン生産労働量）	クロスに対するワインの生産費（ワイン生産の労働量／クロス生産労働量）
イギリス	100/90≒1.11	90/100＝0.9
（労働量の大小）	＜	＞
ポルトガル	90/80≒1.13	80/90≒0.89

- 見られるように、ワインに対するクロスの生産費はイギリスの方が小であり、イギリスが比較優位を持っていると理解できる。同様に、クロスに対するワインの生産費はポルトガルの方が小であり、ポルトガルが比較優位を持っていると理解できる。この点は、先の表2と同様である。
- したがってこのように通説的に比較生産費説を理解すれば、相変わらず、クロスはイギリスからポルトガルに、ワインはポルトガルからイギリスに、輸出が行われることになろう。
- そうだとすると、先のリカードの指摘、すなわち、「イギリスではクロスは引き続いて以前の価格にあるのにワイン（の価格）は下落し、ポルトガルではいずれの商品の価格にも変更は起こらないであろう。」（リカード、194～195頁）という指摘をどのように理解すべきか。通説では説明がつかない。

福留方式での説明

- では、福留方式ではどうか。先に倣って、算出してみよう。すなわち、第1に、「イギリス クロス＝ポルトガルワイン＝40百ポンド」を基軸として把握する。第2に、国内では労働価値説が成立することを踏まえ、それにしたがって価格での表示をしてみる。このようにして表7が導かれる。

表7　別の数字例での貿易前の価格表示（福留方式による価格表示）

	クロス	ワイン
イギリス	£40百	***£36百***
（価格の高低）	＜	＜
ポルトガル	£45百	£40百

- そうすると、先の表6とは全く異なった結果が得られる。イギリスではクロスの価格に変化はないが、ワインの価格は下落していること、また、ポルトガルではいずれの商品の価格にも変更のないことが示されている。「すなわち、イギリスではクロスは引き続いて以前の価格にあるのに、ワイン（の価格）は下落し、ポルトガルではいずれの商品の価格にも変更は起こらないであろう。」（リカード、194～195頁）という文言と一致することになる。そして、片貿易の状態に陥るだろう。
- ここで、リカードの指摘が過不足なく成立していることが明らかである。その意味で、福留方式は正当なリカード理論の継承といえる。

6. 結語

- 「福留比較生産費説」は、①貿易の主体を国家などではなく個別の資本家ないし当事者におき、それゆえ、②その行動には当然ながら価格上の優位性が前提となり、その結果、③国際市場では価格競争として展開されることを明示した。
- そこには、労働と価値（価格）との二重の観点が不可欠であり、また、国内においては資本移動の容易さからいわゆる労働価値説の論理が通用するが、国際市場ではそうした事態には至らないことも明らかにされた。
- これらは、いずれも必ずしも明示的ではないとはいえリカードにより提起されていた内容だが、これまでは残念ながら無視されてきたといわざるを得ない内容である。
- すでに見たように、比較生産費説の通説的な解釈においては、いわゆる労働量で測った比較優位性に基づいて貿易がなされるとされてきた。そのような比較優位は、かなり稀な場合を除き存在する。そうであるならば、いわば過不足のない双方向の貿易がなされることになり、いわゆる片貿易はあり得ないことになる。だが、それはあまりにも現実離れしている。福留は、こうした点にかんして、貿易を「牧歌的な物々交換ではなく苛烈な価格競争」（福留、20頁）と表現した（［補論］を参照されたい）。
- こうした認識は、国際経済や貿易を捉える基礎理論として、重要である。福留の提起した理論、「福留比較生産費説」は、国際経済学研究（貿易論）はもとより、経済学史研究（リカード解釈）にも多大な影響を及ぼすことになろう。